

悠久の京を訪ねて Part V Vol.2



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

PartVでは、5回シリーズで8月16日から開催の第29回『小さな展覧会』より主な遺跡や遺物について紹介します。

海を越えてきた陶磁器 —高麗・朝鮮王朝の陶磁器—

■大川遺跡出土の象嵌青磁

由良川は日本海へ注ぐ京都府北部最大の河川です。大川遺跡は、その河口から約8km遡った地点の自然堤防上にあります。昨年度の発掘調査では、100点を超す11～15世紀の輸入陶磁器が出土しました。京都府北部ではかつて丹後の中心として栄えた府中に位置する宮津市中野遺跡に次いで多い出土量です。

輸入陶磁器の中には、出土例の少ない高麗や朝鮮王朝などの時期に朝鮮半島で焼かれた陶磁器が数点ですが含まれます。これらは14～15世紀のもので、ヘラで文様を削った中に白い化粧土を入れて焼いた高麗の象嵌青磁や、鉄分の多い鼠色の陶土に白土を化粧掛けし、その上から透明釉を施して焼いた朝鮮王朝の粉青沙器があります。



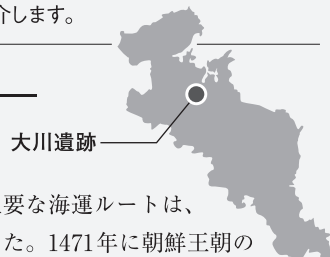
由良川と調査中の大川遺跡（昨年度の調査地）

これらの陶磁器はどのようなルートで丹後地域にもたらされたのでしょうか。

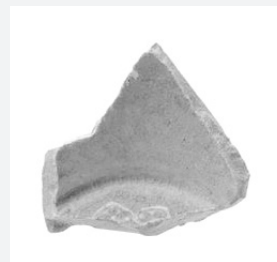
■幻の「北海」航路

中世の都と諸国を結ぶ主要な海運ルートは、瀬戸内海を通るルートでした。1471年に朝鮮王朝の宰相である申叔舟が記した『海東諸国紀』には、京都へ向かうルートとして、応仁の乱が勃発したため瀬戸内海を通る「南路」が使えず、「北海」航路が使われたとあります。その付図に描かれた「北海」航路は、日本海沿いに博多から島根、鳥取に寄港しながら丹後半島の東側で大きく曲がり、宮津市から舞鶴市あたりに至っています。15世紀中頃にはすでに北海航路は存在していたようで、江戸時代の北前船の活躍につながっていくと考えられます。

近年、島根県益田市や浜田市などの日本海沿岸で朝鮮半島製の日用品を含む陶磁器が多量に出土する遺跡が見つかり、これまで実態が不明だった北海航路の存在が明らかになりつつあります。大川遺跡出土の資料は北海航路から由良川を経由してもたらされたのかも知れません。



大川遺跡



高麗の象嵌青磁